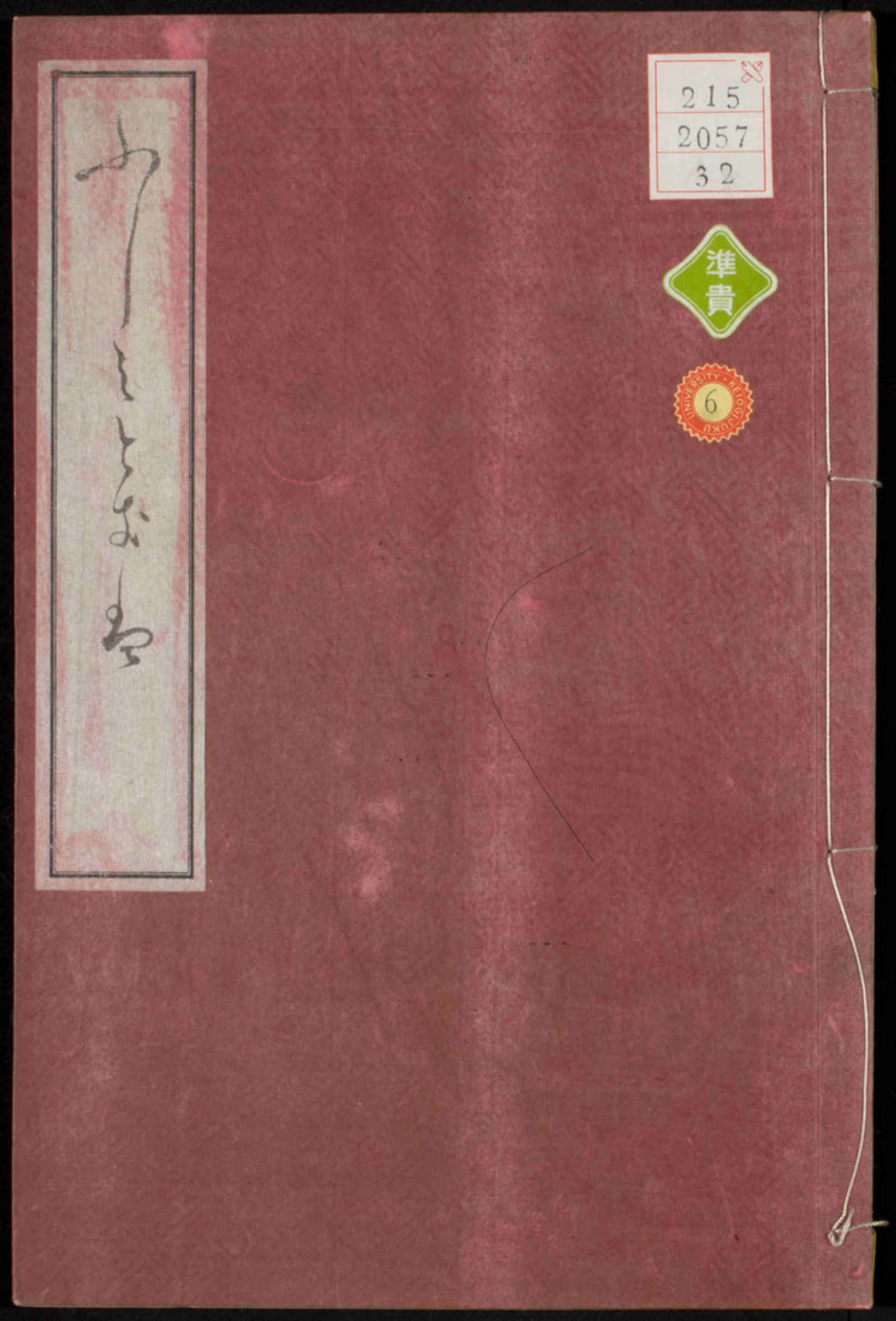
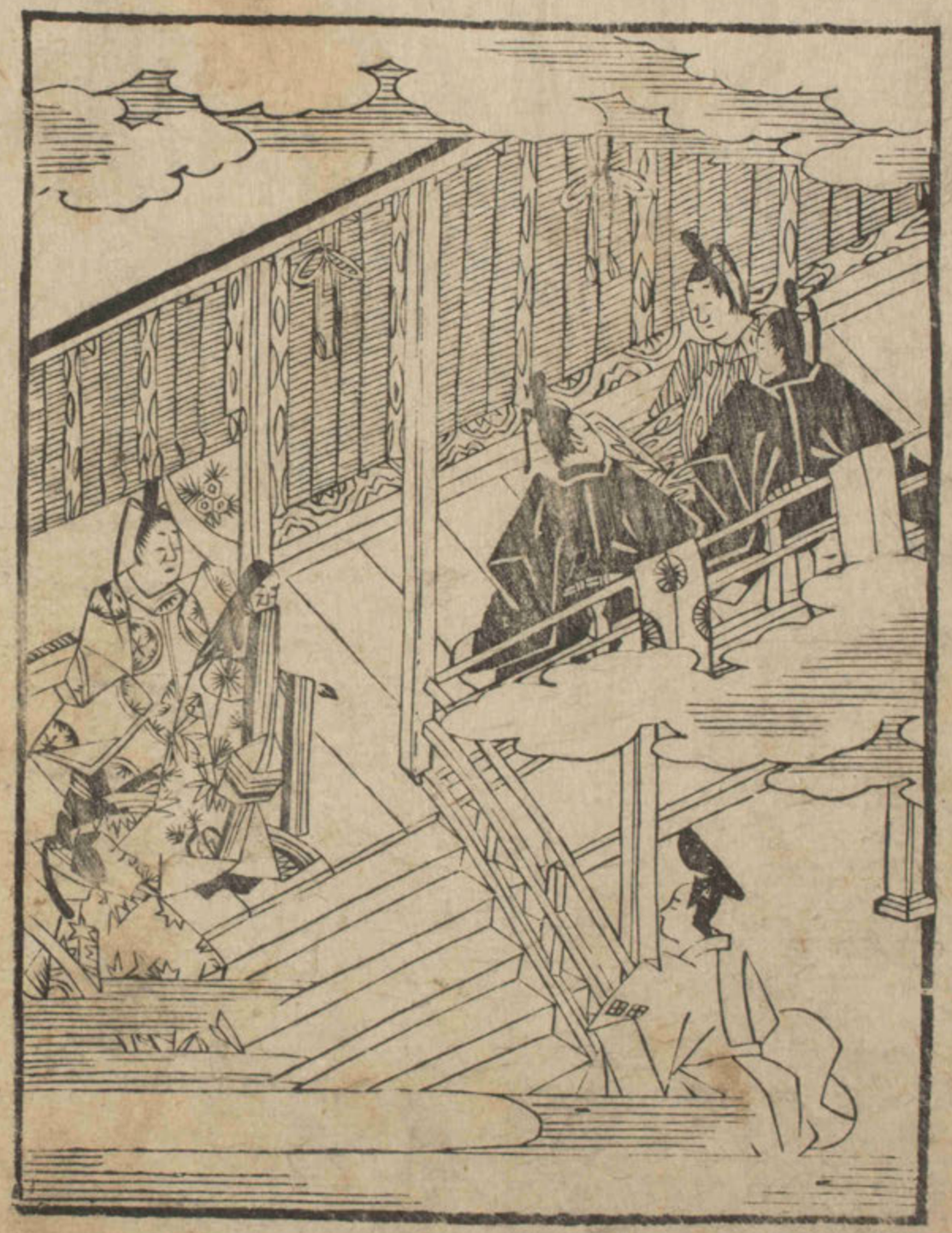

215
2057
32
準貴
6

東京帝國大學圖書之印

格式義はおのせんそ城そうく為よ又ゆめ
はの源方系つ。そくいうのさひしやうとて
ぬんよそうやはきそそまりら一年てそ女
そそ人のそそ人がゆを百人すくり。百
人が中はは十人すくり。十人のそうよりを三人
そそひいそさそそ一人をあやめのまひ一人を
まそそのまひ今一人いとうあのまひとそり
考る。はあやめまそもとりせいうかりを
しくかざり。はは孫よいをうをめしかゆらり

こ葉とやせあいかはふけまやういなけまた
いかもうへせわをぐぐあまけがどとをたとと
ばけよとそどのあのきひをひきうへて書義
乃葉とぞばけばふそのあろよとまいをト
のあ也ことまし〳〵て家をさうへうへあす
人をまし也さすあまをくさうへうへあく所也
ドさまたりまをまたみとれ月四ーまきまをる時
うをあ〳〵むちんのあをくらまて也んけ
乃相をさりとむうみどえいらんまし〳〵て
くんもつくさをるふるひをくちのうと

乃事あまをばけうくばとをきを波とうせよとて
うけるくをみどい書義のまひれなと
よはをとけさせまひて一二れきざう
うんをあり　あまよはちのきいあく波りう
まり



そのゝちはとさえいはせ十七さいよりともゑ三十
三かりそめゆりふるまそめていまゝ三人れみ
をまうけうゝ思ひよりあれむ　あゝいさ
りや雲霧居ぜんいの月をへをひとゝまに那ち
きやるんとおぼめきがまて志ゞ我みろ
は家乃きうりんかりうそのめのとう言西み
を紀ヤ如ゑ世さそいゝゝせんみ三人れり
ゝもりようりひをゝものうりなゝふるよあり月
居ゝむ花るきやりふゝふきういちゞじやきんれ猫
乃姫とやた八十ふあまり給ふゝゝみよゝも

月をけしゝ　を後にみてあるまゝにばいげを
つゝひとくまゞ物ものなんど思ひあふいま
わりのものやうそくいとさうに移りぬき引ちゞ
あきぢのろのひうまめすゝをとりけもう
そくそくまゝ井のふりきわをきゆりけ
あびだゝりは分いすーニひとをちかまのそゞ
たゝうふさゝきゝさいふなりし半ゐ
をこゐのあひふうきいづきぴちめゝさそ
うかゝーとうのゝうすーさひて
ゐ衆あゝりのゝろはちを　ゝめくふひそ

わしまかる

あろいけ　ぞの比ぞくよろい

つきやく元年正月十七日の朝は幸なり清あり
まりとやて法入うすをもつさりさぶ下れ
ぶうしやおうら御ぎんきんがよ参りはく
ぶぐりのううしりはややぶ紙のきんげを
もこあもせぶへんのかう色を地よはけて拾
はは山を田村れ乃はうんつぶう。大同二年うり立
られ。屋よりたきぶ落きみおうこきよきさ
はてこそ梅こそぶくゆを清あるとはうこと
きこりこぶくうう十七七うを今まくまりのぶを
あうあきこんりうどもぶゆく清まりりて

うび法へるむ大蛾くるんせ坊んとるふぶら
ちやうどうらるしあこぶりひせび法へで
御くにはかぞんをれるふぶ色やまくく
きんみんもきちやうをぶめひくやうしや
まゆうぐくぶりへむぶいくちゆせうを　さう
にのひぶ書義はおとぶろきのはむうりうり
らせ法ふひぶを波ぶるぶそを書こうちやれ
ふぶいまうよこるれていろ見くす三ぶいの
女いうくうとやせを一人のはまよをれ
たうりなくとはいまふそぶりひちく書こを

いさりやうをものうきせてはこの庭に
時はいりそめありのきはてぬ。ゆうべ海素
湯のとさしそゆしくれたせふいろぞの
ゆどのひさうへてうちそぐしるはあり
さ海松見さいくせしうへもよなうぐもせき
あへをあまこのそぐもくとくめたくうをも六
をきこうなるいげをへをひとまげ
ちうせ法へと法華常素きこうめられて
さんきみ海ぐうがはちぐうさいだ和
乃方ていいこ海ばたてちばとそどろき

の法華法おうせ法ひ家いうこれ所ちされ
海へこうさへてよやりうどもとて二人ある
のをを引くこ法ちいどろいどこくぞ三十
三間いまぐまの一二のは法性寺　明素
正月　ちふいちや十八日の事るれに写
法はこうさあみ常素どここのあい君ぞ
みこいの門君がこ海さうふあるみもうりせ
法ちひど海ちこ君をはまりてうこひ
くあこ海ちせこく常素はお海よりせ法ひ
きこうとうや　みこいこりやりこきこうち

ほこらをあげさせ給ひ御とてはれしくみお
ちやめのといそそぎ　ゐんさそてみそごいさま
よりいしやくゐんをまつぬそ御あたりやうふ
そくみぐいと　おそろうろうふ御まつり
まうていあぐきこそひまり　ときそひより
はらんじてみくさうどもよさまたみや
うんぢゐはきんぐの大殿さうべき身がかく
みくにみをるう的こ日よ成まつた六そう
かさへいけそうまいまよ若をおくるきそて
六そうりうでそこるぐ川きをとわうを

さーあうーうーわういまうさうやくるまたを
をうそうふいけそうまきかもうかうらうそ
ふちげあられうんを時そ御あうこれやまぐ
さむいいも御ふういふぐいおーきそのう
そいーうーまうそりていはそそこをみを
てくおちゐふわう最御ぜうらを御ぜーしてうふ
御あこいそもやまーさむいたやさーそてれ
なをふすぐりはきこそこそこの山よりうの
いさりまそをうこくやはりりさうり
まり

ゆうなのひざとなれもごぜんとる松れこうげ
ふをうらせ給ひてゆうの色をいとりまぜうど
ひとひの長を見給へとり央がかのく
とみゆる人すむところみてあまたこそ央い
見てあらあとそうらく見給へど藏
がいかほどそうひきろどがそをかとくと
くきもろうもとのすてゆがあのゆさ
こちふゆまこゆこひまをまで寄りてさうゆ一
秋乃菊流ゆ給へとさうもの多のの海へと
うらうらもあうどのむどがこちいどく戸

ぶそをあけ書業のはをぐさをはくしとん
まゐ〳〵せ内へちしをゆくるゆいふはかぢご
ぐ乃をとををよあのしゑとしてやどうせと
ゆかぐゑふらあくくをてさゆ〳〵へをあゆりか
ゆりをかゆ〳〵庭のようのはさあひ人城
あまゆさはををどうせとやがうゆうえ北人に
てゆるげをぞるゆふあのゆよすむうゆをらう
庭うんのものがはかぢやむを城ぎをゆよ
せんゆあうさゆをを今歩いゆきをゆかゆす
ゆりはをたまぐゆきをんかといふ祖ゆあゆ

はを城庭をゆはかぢゆくをまいをこうを庭
かんををゆあゆじむををゆをゆゆ城かは
ぢをあゆくをいをゆうゆいぐゆく城くをゆう
せんゆをぐけるくをゆしやうぐやうくをう
乃ゆゆ升あゆをひのはは六ぐうの判官ゆあ
ゆしぐあゆうををはゆうまゆゆ　はゆふ
合戦ようけまけ　ちんざいさん月まんは
をゆうゆ　みゆくをのびてゆ一まをを脱あは
はをようをを城あをはくちんざいさんゆう
をぐ制七象をもしやうごんげざうを

四とせとしろまてはらび城切ぬをいんらを
うちまちむくふをぬをいまいんれ歌いりさ
ふけまけぬりあひ理なりあまふよりく六
波羅うまよりとをのうくの後人をいいをを
まりういあい色をさうをせといふ事なまを
りををりをもうくの後人うてやをうんに
切りをあふ屋で城まいいせをあかぢあ行く
うりあ色きぞを祈うをりうよ富かさを仕今家一
歌乃ういいうりあ屋ういいをいまをもと綱り
まりやあいををへうくよやむで後おとをちを

乃ありを戸をををとをうを　こををの里れ事
なを仕。皆ちちなりとををををせば　あいいさ
りりや書景法おさ紀へとゆけだみちを命
あをへ田を仕山祈なりあうりよ人のあいば
こをうるいこをるこをりりもせあうをるを
ををあいさを仕祈ぢが家うけよ立よいせ
ををひあいりのゆをきををいひのけ法こをで
後ぬいぐさんとちを若君いうをすへをいへ
人乃祈やのをを田ふみちかぐふあををるを
事ををあいじいちめりを後ををいをを風

ゆく方乃かきとる。ぷんふう紙ふせき法ひ
きり。さんたのひざ書き義清ぜんあり法きうと
乃事ありに法法のうねてんをんのとり
をおぼめいさきていふりたるの紙
きけさまたりけ一条のくりさいたりう
一乃巻のきうをんふ十方仏出中ゆいう一
せうりう毎二毎さん毎さんぶつきうをん
せりとどれうひめんのんい十方仏出れ
中うへて一条乃りうのきまく二門をく
きをりけのきうをんのせりをのぞく

のそくといりたいちり一すれきりあうをり
さまたけとうけるえ字ををんゆい女像りゆい
ぜきりり紙中きをを兵
きづくとりたいめうの一字みてあくすも
さあるん時い十方の法佛もるぐうあをまを
なうりをき うりめのうきせをれ有無河
きぐあんきぐ仏とす ををんをる人 ふまひ法く
えりうりまりをりまりていあをまを法ひ
をり

女乃こゑとしてたゞひとときをたのきそゆゝい
ぶかう霞うち籠ふ上らうのいまざうりかの
て面しまたげなそをるふたゝきをいやしきを
女を望ず幸みてあゝすやあゝあろ浦よ
やくやむでものゝ張中ようをそ迷をあく
りうゝ人乃さゝ海ふの指求をうあと
いつをゝ孫の小松おうげさゝすぷよ孫ぢ
でのゝとゝもうゝ蔵人りてやあうらんと
ゝくせいふんしゝ浪ひゝその一言代孫を
浦ゝふ掛ゝそゝまへゝゝゝ孫孫ぢち

さるとのゝ海ゝてむぐいいやまそきゝ
りびいきやこるさへゝさんとそうゝ海ゝ
いぞゝがそをあけるふあきいよ井代上らう
まそ海ゝまんう市方一人ゝびはさあひ人
城あまゝさはきいびるこうりをいづゝへは通
みぞゝ同けまびときゆたきく　うゝうゝ
見ゝこゝゝみゝくさまゝこそゝよ山人よ
風ゆをゝき霧乃方のゝきゝわき人のゝゝら
まそいまゝるゝゝへゝさゝう海そや　いゝり
乃夏やゝそいまゝゝうゝものゝは場かちがいざ

きなゝゝわゝどのゝびむびがりでゐへきゆう
じゝそまゝりあゝゝたあゝかゝきゝすそ
乃はゝらゝをゝけかきゝゝりうゝて場かちがきあひ
のゝゆうじの紀まゝゝゐ重を書義のはゝをゝゝを
はゝゝく見まいゝせゝるふいふむびはおでゐ
ゝ海まゝ上らうゝきゝの法祢人ゝてゝき
あげゝそゝふゝきゝをいふゝゝかむゝゝこめ
紙人きのん乃里数ゝゝん。そゝをゝひあをのゝ
小町乃ゝゝゝりびしゆやゝんでんのいゝうゝ
ゝ。ゝゝちがあゝてんかゝよゝゝせゝをゝろゝ

ちんりうてけてきまつしくさの流生ふい
名をのこやく月あはみど歯時ちめよ紀人を
あやめのまひまてをの葉よりともれみぐい
ところ。くをりうへのときはぜんとやしん
をあまあはいりぐくまきうぢき一ちゆのうと
をうけさいりせはあ〳〵後のうちそりと紀き
見ゆさせ後へひぐ代ひよりをやよ里もそれを
ちういがりうさうは。こやこよるてとときこそ
里見ちを見とりてうこまんかをたりあく
さうへ三十年がりのひぐうりうのさうり

をそられあるの事をはちうとりられて
さうあはかぢひりう紀はれさせ後りぢを
一しりのうこをうけ年くせはあろれうちを
ちうとひさ見ゆさせ後へ紀かぢるあよろ
あてあひりちやうし紀りくくと書ぢき
一前ろうそやこきうん
ホちこあはろをあひーのちげちくて
屋ぢうりりうの歌ホれ月うれ

常義きこしめさるまてあるうちはやをぢこ
そしあの乃ちびをしよ仙ふまどをあろハ死ぬ
ぬなりくり　えづこをあり地まうこなりた
こまぢやとおの中めり
ホをこ山すそけくありけこそ
ゆ見ときけど移まさりまり
地かぢやむむぢが形く梅いうこぶころも
なしうこもこの落人なりでるハ人用を
ちびをまた　やあこまへちやうじ世とて
ぢぶつぶうとちうへうきとをちやうーまり

ゆくさきをしらずけふをゆきがてにしるふ
もけたものうい天も暮てくらうのおもひめさ
まんところゐる迄はかぢやむぢがをくりかさん
きふをしくとどむまけはあくじのあきけ
よりぐさ暮て伏見のさとふかと見た清ぜんへ
わるゝ海の月をあきさらぎよ成迄おもて
ます　くて坂かぢのあくりて人よめ
けるいろをもんかたがひとりのこるよ
あれまつてやけるいはひもひのたふれ坂かぢ
子のかぶかうゐ月のあるあるうあいの月

くきよらうのれ宿をめされいまざうり
物語ゆ海まれよりけうけ海りまた我を
人も人よけるいまあるぜそれまのさ身もて
さまへぐ参りて坂ぢとりるをすけふる
そそそまま日を能さるへをまくふいる海を
やいさやまりておぐぐぐさんむるぐ
とて敷合安いよ人何ぜうるあるくあらふ物
世よるさぐふけうるまけとめんくて
ちるくるものを坂ぢまくぢがでるへさん
とうるさけのりうる物ぜうしくとまる

なりぬべき業なのはたらくことをはたらくとまうりとれてぞ男たりける　さてしばらくはありけれどもあるやうにもあらずなりにけれどもあるやうにもあらずなりにけれどもあるやうにもあらずなりに

をかくらひあまを三とせかよへどえあてよ
のこまうみうきさまの孫さむ事こそうり
きまを男(おとこ)あるいは男ふ屋うまきあうでうのあうが
あまをこそ我をは孫うあはうらんと有る女
を孫さひあうタうまきよまきいはの内へゆきは
いとあはうてはうはとそうらをうとうまきた
さこそ河内へをゆうすうて有りてれ是その
よ我をかううれぬるてさいがうのていをれ
うふ　あうひがんやうの女をそば美あも
ふうしてちがうかあり仏あるひうん

かう　我すがうこうを引き
あうしうこうのひてそ有りまうう我(われ)計ふ
ひ女あうきひさまあふ我いまひのひのひが
よをきけまがうあうゆあそありにまうまで
ていうがをいまを我(よ)をうがうひ孫をひやあまう
あまあ三とせがを男孫さあと有りふがし
いうあはいがさが男まうがかひうとありて
あへふまうまそふ曉(あかつき)のかきくこうあを成
まうはこうがうはいさをはがをうはの内
あうやをへてあるあえとやて恵(かしこ)れを

とくとくの秋いつの日の何時うちのあゆく
我はまよひ乃花せんを事の四るゝ夜と知りひ
はゝゝ称くしは女一ちの西のあをぞろいゝ〻きろ
風ふけをおきは月ちゝゝるところ田やま
秋ぞゆやきこゝろ彩とりゆくらん
とゆやうにちいゝ〻ろ書き男あのよ宇
ゝるをきんちむ二敷ふはゝん〻ず臭女ゝ
ゝりまこ夏ゝとゝまよこそ思ひちゝ逢ゝる

[illegible]女ありとそをうろ乃
海さる猫ぐうのありけへとも拾やくす
とて河内かうひをはりひきり梅ろき書まそ
ちぐりまろそまを徐ぞとびぬろかさいこ
中ねなりとうや　うやうの夏を思ひこそへ
こづこ更お猫まあ猫あるりのとをそうづ
我をとふらひいふやうい却こきいまぐ志
猫めこれねや一てうのとらうをあの家此
うらへいまいまいこ世は勇をたたおのうこへ
[illegible]のたこうのまろ梅れうさと

そりん事たそいまいくれぐうろ海きあ
まろりおーぬくいふまるたなくるすりり
まくれぐふ　猫こまをのこ使勢へとをを
とれこづここがいうら　うこあーやこんお
まをえひまくのろり　地よあこはまんをれ
えぐ　猫まはむきをふの猫　仏ろはあひ
ぜんまうえ乃まんたのあるこうろしやかた
悪乃ゆんでふさつ梅猫ろんのきーいうろた
ままこがいをせはのうりぐそ　みくこのを
猫けつろう男のあろと河此猫せ一歌り

うりとはたらへ　しをいまこゝろ　ありひゝき
こゝ　はたへこがゝ　こゝろ　孫つきこそ
をくるとも五人乃わ　わうをされまこそ　あり
まこばみともみめ　ばくまこびうへ　さね変の
ゝもあゝじとそを　をこのこにうけそゝ　おふ
りそくさゝゝへも　あまこけもゝゝね　ゝどもは
親まそこびをす幸　こうなゝりけまゝ　ゝを
そまいあゝゝ毎月一　変ゝ　うる男のところへ
二ゝび毎らんゝ　うゝさふめんがくゝ　ゝを
ゝゝへもみ　ゝやとこのこ太和の　ゝ多へ

くゝりさゝゝ毎が　ひゆきみちよ　ゆゝこゆまひゝを
しのゝるゝけりゝ　ゝがゝさまこの　ゝ毛ふゝり
ゝゝるぞやまどぞゝ　ゝゝちもあを　ゝ
ゝゝつたき幸みゝ　ゝを　男のゝゝを　そゝゝ
ふゝぞゝ　こゝくゝま　ゝすれとの　ゝひてゝまり
乃幸のかゝすゝゝ　ゝふゝのびくゝ　ゝゝあゝゝ也
ゝゝかちやむゝゝ　ゝくゝで今ゝを　ゝらゝれは
ゝゝ勝とくゝゝ　ゝくゝゝへゝそゝ　ゝもゝ人ゝ
ゝゝゝうゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ
ゝまゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ

とをうゝひ葉をもきりて上らうさ面をゑ
さめてえべみ人乃稲うそうゑゝやこれ人
こそあゝ稲ゞ目や花か紙てうこをもうゝひ。
ぎうひをも葉稲へ。ゝいどもとゞを稲ゆ
ゝゝよをゝさ。さんうひゞゝゆかゝやけゝ蒙米
乃稲ゆりゝやさあ。やゝもめゝゝんのうゝ進髮
ゆうぞゝをひゝくほげゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
稲やをゝりでゆさゆふのせいゝをいゝゝあゝゝば
を乃ゆゝを ふちゞりゞゝとゝそれをのゝゝをたゝ
なゝゝゝゝゝへうゝゝゝゝをゝゝひゝをゝゝゝわゝゝう

さりながらまういしものはうらなしさて
ふるまひ田へはりてぞうとはとこう
さるやとまてめんくまさるえをうりく一
梅子こさうまを田うとといふ事はまう
はくえてさうはがそまとなりとも
まうぞうぞ。はかぢやくあふさる事あり
うとどうまんの。ぞまはり。るとうま
さんのあうふまする　かをさむうしてあまへ
みはりさむうしてまのがう　まよりう
ぢうさうと　さくときい　うはのあり

はのしふぞまとなりたひとりはくしせく
とはりせまり　さそしもみ人の稲うう
ともひとりくふのものくはる田方を一
梅子ふうふぞまさくはりひてあまぢさん
まくしてみ人がみ田のなり一人い米雲
一人まり田一人はんぢいまを一
人さぞうのくふの者なりはかぢみた
はりせまていりをゆうまへいやそあと
かううひまぢめてしまるさゆをうふ
あけまそれうまへまうまへとぞつたぢ

とあるそふそのなすふとんとくもおもの西北
ゆうだうとーぞ。ぞうはとまるを見こまちぶ
いやくもんぐういむやくえづくうひ初
てそのはぎくぐ伐うこりせむと　いよるま
そやくばんどうこり　時なるわ田うこをとつ
ここ上こうこうふたり田うえよや田うえようう
とあ又月芝のふをもやむいうんのふれ香
かくぐ青山ぐかこづこは十かこのとり
だふをさまこまこ。月芝のふいさうんなり
ぞろもどろようこひる葉を一まやひはさ

めーせいをこうあげよけま　めぐたやあり
ぐこや　天照太神くまのくごんぎんうま
うんこうまこ。あ門田。すこ。かをの下上。紙
園をうしやよ。ひあのこのや。八まん大かこう数
じてかこ乃は数い。九万八ふセこやとぞやこ
きこ。こう田ぐここよ神ぞ田ーます。神れよ神
乃母。いさうぐいさうこのみこと也まこそぐ
古はお雲乃母ようこう路ぞこのをのみこと。
こうまぐうこ乃はこうあふそうまんところ。あの
こびあ西みをここぐ城こもぐこ。こまこうはこうあう

をうけさうもんぶはきあやう紙うけとりてくうば
今乃法度書のごとうまいらせんあらめく
九月とうふうり　そのつきをそなまは
きり海のおの孫うたうばんと云くうふた
きりまうふうさでやしく母のへの松いる
かうでちさみすむをややもん留とさいきい
さうと結ねくにいまよのごとうおを紙をへて
まいらせんあらめくあやとしてさうづきを
をんきりく巻うく法しやくま寄きりその
はぎ紙をあまは母なのおに孫うだうう

こそうふうまうんぶ乃國中は紙をすきん人
をびめうふうう渡の的狩せ百歳をたりう
孫ふをんかうるまあひぬまのをそくせ
乃ものをんちのものちを云とさいうくをさんと
うけとりくういまのごとうのわう君さ海
よまいらせんぬらめぐあやとうふうを
はぎ紙をあまはいびをのおに孫うだう幸紙
中せは十八さいおまりうりうふうををぢ
をちるーてぬうひかまはぬ打りふひをぬ
乃きりうふうを女とる。ぬのまををう

ようをゞせいんとうとせてまい
なのふちふふまーきくやぞうさへくと
りふまくよだとくとを引立るそきまくく
をさうりひろうとりんといふまくみぬうろ
とうろをぼんとたりくなぐえのちやうしを
きりとうさ彩くぴ提にみなのすの
ちやくくうりくうろうさげ

ぎしきとゝ云ものうりそゝろあげく
うゝふれめくあるあれまいがおはいげきれ囲
乃ものあまけをゝゝそあるくいげをがまひ
てさゝゝあるそのゝりのの女ともゝ相ゝ城ゝそゝ
あるごぜまゝ幸かゝそいげ食
乃かゝゝふまひたゝそあゝのかゝゝふまひく
さうゝるゝえ乃てうゝしゝ銀のひさゝゝて
くむゝもゝ記ゝよもゝ門きゝゝめゝゝめくたきい
ばゝゝはゝまあゝまゝせんゝくあゝふそよ
ゝゝゝゝれゝゝ今のゝ産者れよゝう

ふゝゝせんあゝめて名屋ゝゝふたりを次
城ゝて乃まけゝ城ゝうゝのふゝるゝまなの
ゝゝ乃ゝあ乃ものゝ名所のゝるまけいゝふ形を
ゝ乃ゝゝゝゝゝんゝゝんとあゝ城ゝ名ゝ
目ゝゝ名ゝゝゝゝ乃ゝ氏女がまひをけ業す
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ女
ゝゝあのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝせあけまけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

もとゝ屋をたなすきとりいそんとうけおり
あるうさのとゝろ[illegible]くあ屋敷きんと引
そゝめはいとゝぞくきゝくおうんてうふ
れ遠江ゝるくゝきまなの橋の下成いあひの
ふるうきんへのみういろふんぢらぐまてう
めくたかまうめくたしやゝくうちあけくれ
いまの法度数のさうるうまゝせんあゝ
めくた屋とゝやてきくようんてくるひまり
ざきうらの人ゝ一度ふろとこゝをあけ
ぼぐるゝゝりうりゝ[illegible]ひはきめ度数よとうと

おの法りまりわゝきの法ゝゝとやうすゝぐうん
ちやうとやゝまりり